

徳島県徳島市における親水空間と住民・来街者の関わり

長谷川 知優

I 研究の目的と対象地域

親水空間の形成は、大都市から地方都市までさまざまな場所で行われており、地域を活性化することに役立っている。本研究では、親水空間について、地方都市におけるその形成ならびに住民および来街者の関わり方について明らかにすることを目的とした。対象地域として徳島県徳島市を選定した。地方都市のうち複数の河川が市内を流れていることに加え、現在複数のNPO法人が親水空間の形成に関わっていることから事例として取り上げた。

徳島市の中心市街地には、吉野川の分流である新町川・助任川が流れている（図1）。新町川・助任川に囲まれた周囲約6kmの中州は、上空から見るとひょうたんのような形をしていることから、「ひょうたん島」と呼ばれている。その内部には、徳島市役所やJR徳島駅、徳島城趾に整備された徳島中央公園や徳島市立徳島城博物館などが立地する。また、ひょうたん島を30分で1周する「ひょうたん島クルーズ」が年間を通して運航されている。

ひょうたん島より東の新町川の河口付近には万代町と呼ばれる地区がある。ここには万代中央ふ頭があり、新町川の河口に面した東西約500mの範囲に倉庫群が形成されたが、1999年には貨物の取扱いがなくなり、使用されなくなった倉庫が取り残されていた。

II 研究方法

以上で述べた研究目的のために本研究では以下の調査と分析を実施した。

①徳島市立図書館に所蔵されている文献の調査から、徳島市における親水空間の形成の歴史について明らかにした。その結果はIIIに示す。

②徳島市を訪問して現地での観察調査とインタビュー調査を行った。現地へは、2023年10月18日から19日までと、同年11月8日から9日までの2度訪問した。観察調査においては、新町川・助任川沿いの親水公園を確認した。インタビュー調査は、徳島市の親水空間形成に関わるNPO法人2団体の代表者を対象に、半構造化形式の方法で行った。一つはNPO法人新町川を守る会（2023年10月9日実施）であり、もう一つはNPO法人アクア・チッタ（2023



図1 対象地域(徳島県徳島市)
(背景地図にはOpenStreetMapを使用した)

年11月8日実施)である。両団体の詳細およびインタビューの結果はIVに示す。

③「ひょうたん島クルーズ」という単語が含まれるSNS(X, 旧Twitter)の投稿について、投稿者へのアンケート調査および投稿記事のテキストマイニング、投稿写真の位置の同定とその分布の分析を行った。アンケート調査は、2023年10月10日から30日に実施し、ダイレクトメッセージを通じて184人に調査を依頼し、42人から回答が得られた。投稿者の居住地や年代、クルーズに乗船した感想などについて質問した。テキストマイニングにはKH coderを使用し、2022年12月1日から2023年11月30日までに投稿された435件の記事を対象に、単語の出現回数の集計と、単語間の関係の分析を行った。投稿写真の分析は、同期間に投稿された135件の記事の写真を用い、撮影位置の同定には現地の観察調査において筆者が撮影した動画や写真と照合した。これらは実際に徳島市の親水空間に訪れた人々の行動と意識を探るために行った調査と分析である。その結果はVに示す。

III 徳島市における親水空間の形成

高度経済成長期以前、新町川は泳ぐことができるほどきれいであったため、川は人々で賑わっていた。第二次世界大戦後は、川沿いにはバラックが立ち並び、水上喫茶も営まれていた。1956年11月26日に新町川沿いの藍場町2丁目付近から出火した火災は「藍場町の大火」と呼ばれ大きな被害をもたらした(高橋 2020)が、その復興



写真1 新町川沿いの遊歩道

(2023年10月19日 筆者撮影)

の一環として新町川沿いの緑地化が進められ、親水空間形成の萌芽をみた。しかし、高度経済成長期には生活排水や工場排水によって新町川は汚染が進んだ。さらに1961年の第二室戸台風により高潮の被害を受けたことから、護岸整備が進められた(原 2019)。この両者によって住民と川との関係には距離が生まれ、川の汚染はさらに進んで深刻化した。

その後、徳島市によって川床の浚渫や導水ポンプの設置などが行われると、川や川沿いの地域における環境整備の必要性が高まった。1985年以降、徳島市では親水公園や遊歩道(写真1)の整備が活発に進められるようになり、2008年にはLEDを用いた景観整備が行われた。2014年には、水を活かしたまちづくりを進めることを目的としたひょうたん島川の駅ネットワーク構想を実現するために、ひょうたん島川の駅連絡会が設立された(徳島市2014)。この連絡会は、ひょうたん島や川をテーマに活動する市民団体間のネットワークを構築し、各組織の連携や活動の活性化を図ることなどを目的に活動しており、本研究で調査した二つのNPO法人も参加団体である。

現在、徳島市における親水空間形成の取組みは、行政の単独事業ではなく、複数の民間団体と共同で事業を行っており、活動の幅が広がり、活発化している。

IV 親水空間の形成に取り組む団体の活動

1. NPO法人新町川を守る会

NPO法人新町川を守る会の活動は、戦後の高度経済成長の影響で汚染された新町川を「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と、1990年3月に有志10人会を発足したことが始まりとされている。現在の会員数は約300人で、法人が40、個人が260である。

主な活動は、新町川や助任川などの清掃、前掲のクル

ーズ船の運航、緑化活動や花植え、イベント活動である。ひょうたん島クルーズは、乗船料(保険料)として、大人(中学生以上)400円、小人200円を徴収している。現在のクルーズ船の利用者数は年間約5~6万人である。最も乗客が多い時期は8月に開催される阿波踊りの時期であり、8月だけで1万人以上が乗船する。

以下に、NPO法人新町川を守る会の理事長であり、活動に長年関わってきた、中村英雄さんに行ったインタビュー調査の結果を記載する。

中村さんは、NPOが主体となって親水空間形成の活動を行うことについて、「行政が川をきれいにすると、それが当たり前になってしまうため、川をきれいにするということは行政だけでは難しい。住民が活動して、それを行政が応援するという、行政傘下でないといけない」と語った。

中村さんに、会の活動の特色であるクルーズ船の在り方について聞いたところ、「このようなクルーズ船は観光客向けにしてしまうことが多く、料金が1,000~2,000円することも多い。地域を良くしていくためには、まず住民が利用してくれないといけない。住人が楽しいと感じる場所は観光客も楽しいと感じる」と考えており、料金については、「とにかく皆に川からまちをみてほしいという想いでこの料金(400円)にしている」(丸括弧内は筆者補足)と語った。

中村さんは最後に、「私はここ(徳島県)が元気になったら日本が元気になると思っている」(丸括弧内は筆者補足)と語った。現在の個人会員数は前掲の通り260人であるが、このような熱い想いを持って活動を続ける中村さんの姿をみて、共感した住民の参加が増えていると考えられる。

2. NPO法人アクア・チッタ

NPO法人アクア・チッタは2005年6月に設立し、万代中央ふ頭の再生を行っている。水辺を活用したいという想いを持った徳島市内の人々が集まって活動が始まり、2010年からは徳島県と協働して活動を継続している。

主な活動は、新町川の清掃、イベント、まちづくりである。まちづくり活動に関しては、年間に老朽化した倉庫を1棟から2棟改装している。現在では全体の約3分の2以上の倉庫が改装され、カフェやアート作品の展示スペース、コミュニティスペースに利用されている(写真2)。

以下に、NPO法人アクア・チッタの事務局長である岡部斗夢さんに行ったインタビュー調査の結果を記載する。

岡部さんは、NPOの活動の中心である再生された倉庫の活用方法を考える上で、ワークショップを開催したり、

東京の天王洲アイルを視察し、そこの活性化に携わる倉庫業者からアドバイスをもらったりしたという。

また、親水空間の主な利用者になることが期待されている市民の親水意識について、「シティプロモーションで徳島市が水都という言葉を使い始めたことで、市民の中で言葉としての認知が広がっている。20年の活動の中で水辺を意識している人は増えてきたという印象はある。どのくらい水と関わっているかは、やはり人それぞれで、差があるのではないかと語った。

V 徳島市の親水空間を訪れる人々の行動と意識

1. SNS投稿者を対象としたアンケート調査の結果

前記のアンケート調査の結果から、ひょうたん島クルーズに乗船した感想に関する回答をみると、徳島県在住の回答者からは、「県外の方にはケンチョピア（徳島県庁前）からみる眉山をみてもらえるのが、県民としては嬉しい」（丸括弧内は筆者補足）という景観についての回答が得られた。一方、徳島県外在住の回答者からは、「まちの方々が手を振ってくれる温かいおもてなしを受け取れた」という人々の温かさについての感想が指摘された。また、県内外どちらの回答者からも、「料金が安い」という回答があった。

2. SNSに投稿された記事・写真の分析

SNSに投稿された記事の分析結果をみると、単語の出現回数は「徳島」が最も多く、続いて「行く」「楽しい」「船」「思う」も出現回数が多かった。「眉山」や「阿波踊り」「アスティ」といった徳島市の景観やイベント、施設に関する単語も多く出現していることがわかった。

さらに、単語間の関係を共起ネットワークからみると、「ひょうたん島クルーズ」という単語と、「乗る」「楽しい」「行く」「観光」といった単語が同時に使われていることがわかった（図2）。このことから、投稿者自身が乗船してきたことをSNSに投稿している可能性が指摘される。ほかには、「景色」と同時に「人」「手」「振る」が使われていることから、川沿いで手を振る人々も景色の一部になっているのではないかと考えられる。

SNSへ投稿された写真の位置を特定した結果（図3）からは、徳島県庁前のヨットハーバーで撮影されたものが最も多く、そのほとんどが眉山を背景に撮影されていたことが明らかになった（写真3は筆者が撮影したものであり、参考として掲載した）。

VI 得られた知見と考察

徳島市では大火の跡地に親水空間形成の萌芽がみられ



写真2 倉庫を改装したカフェ
(2023年11月8日 筆者撮影)

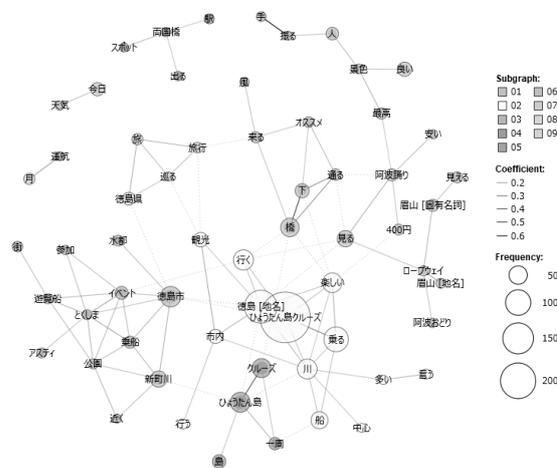


図2 単語間の関係（共起ネットワーク）
(SNSの投稿内容をデータにKH coderで分析した)

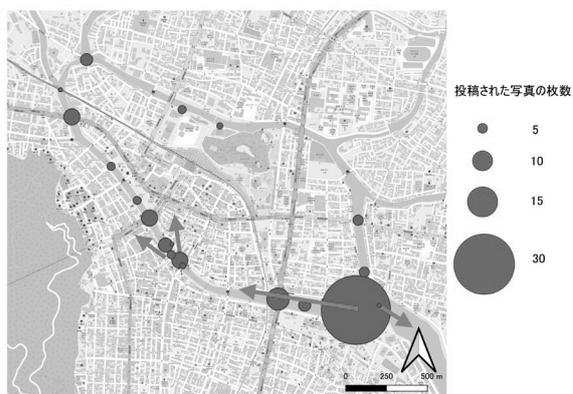


図3 投稿写真の分布
(背景地図にはOpenStreetMapを使用した)

だが、近年は自分たちが住んでいるまちをさらに魅力溢れるまちにしたいという前向きな理由で親水空間形成の取組みがみられる。その担い手に関しても、当初は徳島市が主体となって公園の整備や緑地化を進めたが、近



写真3 クルーズ船から見えるヨットハーバーと眉山
(2023年10月19日 筆者撮影)

年では住民が主体となってクルーズ船の運航や清掃活動に取り組んでいる。

それらは主に新町川沿いと万代町で取り組まれており、前者では公園やボードウォークの整備、クルーズ船の運航がみられ、後者では倉庫群の景観をそのまま活かして住民の交流場所づくりが行われている。前者の活動を担っているのがNPO法人新町川を守る会であり、後者の活動を担っているのがNPO法人アクア・チッタである。このように、同じ市内でも場所と活動団体が異なっており、さらに親水空間形成の方法も違うことが明らかになった。

両団体の代表者に対するインタビュー調査からは、徳島市には熱い想いを持って親水空間の形成に取り組む人々がいることがわかった。熱い想いを持つ人々の活動をみて共感し、共に取り組む住人がいるからこそ、親水空間形成における民間の持つ力は増してきていると考えられる。また、SNS投稿の分析からは、クルーズ船に向かって手を振る住民について言及されていることも多く、親水空間の形成によって住民同士の繋がりが生まれることで温かい雰囲気がつくられ、そこに観光客が訪れ、住

民の温かさを受け取ることができていると考えられた。

その場所に合った親水空間を形成するためには、住民参加が重要であり、それにより自分たちが住む場所をどのようにしていきたいかを活動に反映させられると考える。その点、徳島市においては、行政だけでなく住民主体の団体が親水空間形成に取り組んでおり、それが核となって、ほかの住民や観光客を惹きつけ、愛されるまちを形成することができていると考えられる。

謝辞 本調査は2023年度自然地理学奨学金の助成により実施することができました。お忙しい中インタビュー調査に応じてくださったNPO法人新町川を守る会、NPO法人アクア・チッタの皆様、ご指導いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

文献

- 高橋 啓 2020.『徳島市史 第6巻(戦争編・治安編・災害編)』徳島市教育委員会。
- 徳島市 2014.ひょうたん島川の駅連絡会.https://www.city.tokushima.tokushima.jp/shisei/machi_keikaku/townplanning/kawanoeki_kai/index.html (最終閲覧日:2024年1月30日)
- 原 政輝 2019.「水都とくしま」における、新町川のとりくみについて. 令和元年度全国多自然川づくり会議発表資料.
<https://www1.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyouu/tashizen/pdf/r01/4-4siryo.pdf> (最終閲覧日:2024年1月30日)

はせがわ・ちひろ (72期生)

Relation between Hydrophilic Space and Residents and Visitors of Tokushima City, Tokushima Prefecture

HASEGAWA Chihiro